

3月28日、東日本大震災の騒然たる中で平成23年総会は出席数が心配されましたが多くの議員の方達の参加により原案通り可決させて頂きました。ありがとうございました。

本年度は市制40周年を迎えて記念行事が多く予定されておりますので市及び諸団体と連携を密接にして記念事業を軸とし、君津のまちの活性化を目標と致しております。

こうした私共の事業方針に、市当局も大変な理解と期待を頂き、緊縮予算の中で格別のご配慮を頂きました事を皆様にご報告をいたし感謝を申し上げる次第であります。

4月に入ってから会員の方達から「お客様が急減し困っております」との声が多くなっております。東北の方達への同情から花見や歓送迎会等諸行事が中止となっているからであります。自粛は結果的には不景気運動していると同じですからチャリティー、義損活動を加味した行事として是非実施して頂きたい。何故なら共倒れになってしまうからであります。

また太平洋岸の東北については、物心両面の支援をすると共に、日本人は単一民族でありすべて人は家族と同じであることを再認識して頂き、共に助け合って生きていくことのできる安心感、信頼感を持って頂ける様務めて参るべきであります。

そして今、生きておられる事に感謝と希望を持たれ、いつの時代にも生き残った人々がしてこられた様に、辛いけれど次の世代の為にみんなで力を合わせようと思ってもらえる様尽くしたいものです。

一方被害の少なかった東北地方は観光に依存しております。その観光客が激減して困っております。東北地方に多くの観光客が訪れることが励ましとなり、東北の産品を購入することが東北地方の収入増加、復興費用を支援することとなるからであります。

私の友人の息子は東電に勤め、恐れるよりも私たちがやらなければ、今原発の被爆の中で戦っております。家族と市民を守るために突入して行った息子に対して母親は行くなととめられなかったと涙を光らせておりました。私達はこうして命を賭して戦っている東電、自衛隊、消防隊、警察官等の若者たちへもっと大きな声で感謝の声援をおくるべきであります。菅首相にそうした思いやりが見えないことは一国のリーダーとしての感性、器に欠けているとしか思えません。新日鐵の三村会長が日経で「トップは有事にリーダーシップをどう発揮すべきか」の問いに「危機になってリーダーが力を発揮するというのはとんでもない。平常時にどんなリーダーであったかが危機の時にはっきりするということだ。現場の状況が分からなければトップといえども指揮のしようがない。日頃から現場を鍛え、信頼し、彼らのやることを認める体制が出来ていれば命令しなくとも現場が見事に対処するものだ。」とっております。

誰もが今日一日生きるために精一杯です。

しかしこの廃墟の中で次の世代の為に新しい世界を築く希望を失くしたら人は生きて行けないのです。私たちの先輩たちは何度も崩れ破れても見事立ち直ってきました。

私達もまた！！